

あさひ

旭木の駅② (愛知県) 住民みんながいきいき

行政も実行メンバーに

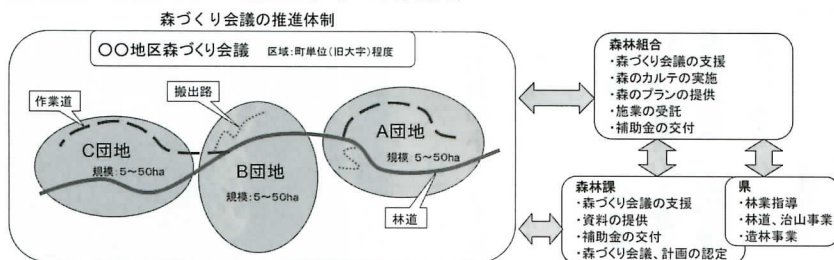
「豊田市旭支所は実行委員会の一員として、共に汗も人も金も出させてもらう」

支所長が胸を張った。1期、2期とその成果を見守ってきた旭支所は、2012年4月から正式に実行委員会に参加することを決めた。木の駅では行政のスタンスが難しい。最近では、行政主導で林地残材収集の搬出補助金としてトン当たりいくらかの地域の商品券を配ることを木の駅としている事例も多くなった。しかし、豊田市旭支所は木の駅を自治活動の一環と捉え、そこに自らも参画した。補助金でなく負担金として払い、さらに人も知恵も汗も出し合

って、地域と共に悩もうという姿勢を明確にした。

豊田市では2000年の東海豪雨被害の教訓から市民参加型森林調査の「森の健康診断」が始まり、その結果人工林の3分の2が放置林であることが明らかになった。市は早速、「とよた森林学校」を設置し、「豊田市森づくり条例」を制定した。2008年から市と森林組合職員が各集落に入って「森づくりの団地化」を推進した(下図)。その結果5ha以上の団地200団地約3700haが動き出した。旭地区でも37団地570haで合意ができ、間伐が始まった。行政・森林組合・地元山主の目線が同じ高さに揃い、木の駅がその相乗効果を加速する。

団地化の推進モデル(豊田市での実践例)



▲豊田市では、地域の森林所有者等で組織される「森づくり会議」が各地区に置かれ、森林組合・市・県と連携しながら山の団地化を進めている。(旭地区では)「木の駅」が始まり、切り置きされた間伐材が軽トラで盛んに搬出されている

寄付された材が山積み

行政だけではない。森林ボランティアも共鳴する。森の健康診断を担った矢作川森林ボランティア協議会(矢森協)の各グループはこぞって「志く材」を土場に積み上げる。志く材はモリ券の発行を求めない、運営への寄付材だ。これまで間伐材を林中に切り置きしてきたそのもどかしさを晴らすように、志く材コーナーに山と積み上げた。

山主である鈴木敏治さんは、矢森協に加盟する「とよた旭高原山楽会」の代表だ。2008年、定年退職1年前に「とよた森林学校」を修了しグループを立ち上げた。「所有する山は10haほどあるものの、山仕事どころか境界も何も知らなかった」と穏やかに笑う。それが今では自分の山だけでなく、近所の山の間伐まで引き受けるようになった。材の半分は志く材、残りはモリ券に換えてグループで宴会だ。



▲旭木の駅の土場の様子。寄付材である「志〜材」(丸写真)が山積み



▲出荷で得た Mori 券を手に楽しい一時を過ごす「とよた旭高原山楽会」のみなさん



▲旭木の駅女子部主催の間伐イベント。女性ならではの柔らかな感性で、活動を支えはじめた



▶「旭木の駅」の実行委員長、高山治朗さん

女性ならではの活動も。「木の駅女子部」

西川さん(地域のキーパーソン。先月号参照)とともに事務局を担ってきた高部ほなみさんは、30代の女性3人で木の駅女子部まで作ってしまった。「地元のオジサマたちは放っておいても面白がっている。今度は、女性や子ども、都会に住む人たちが木の駅につながるようにしたいし、もっと山の良さを知ってほしい」。苦しい台所

イキイキ働く背を見せる

「丸太を満載した軽トラがそこら

事情を知る彼女らはまず、運営資金や補填金を賄うために、一口1000円の寄付金を呼びかけた。次に間伐材から葉を作って販売した。夏には子どもたちの間伐体験を開催し、特別に1枚1000円のを可愛い子供モリ券まで発行した。商店探訪をして特産商品発掘に乗り出したりと、女子たちが柔らかな感性で木の駅を支えはじめた。

中走り回っている光景なんぞ、これまで想像もしなかったぞ。林富蔵さん(森林組合参事・地域のキーパーソン。先月号参照)は呆れかえる。高山委員長(40年ぶりのUターン者。先月号参照)は「暗かった山や竹藪、荒れた土手がどんどんきれいになっていく。おやじや年寄りが背筋を伸ばして山や野良でイキイキ仕事をしてい

る。そんな村の景色や年寄りの姿を帰省のたびに見ていると、子どもらも『自分もいつか帰ろう』と思うようになるんじゃないかな」と遠くを見る。「美しい村など始めからあったわけではない。美しく暮らそうという村人がいて、美しい村になるのである」。柳田國男の言葉が心に沁みる。